

青森県近代文学館報

令和3年度特別展「北村小松生誕120年特別展」

会期 令和3年7月10日(土) ～ 9月12日(日)

八戸町(現・八戸市)出身の北村小松は、明治から昭和にかけて劇作家・映画脚本家・小説家として活躍しました。日本初の本格的トーキー映画「マダムと女房」の原作脚本を手掛けたことはもとより、「空とぶ円ばん」等のSF作品を生み出した業績でも知られています。生誕120年という節目に当たり遺品や直筆資料等を多数展示し、「モダンボーイ」と呼ばれた多才な作家の足跡と素顔に迫ります。

具体的な資料としては、小松が昭和33(1958)年、デンマーク旅行の際に用いたスケッチブックを初公開するほか、昭和7年に「東京日々新聞」に連載された「限りなき舗道」の挿絵画稿(岩田専太郎によるもの)や「火」が掲載されている昭和16年の「少国民新聞」(大阪毎日版)の原紙、つづきよみもの「空とぶ円ばん」が掲載された「小学三年生」(昭和25年から26年にかけての13冊)等を展示する予定です。



北村小松のスケッチ「ベルシャ湾」(初公開)

令和3年度企画展 □中南津軽文学散歩

会期

前期：令和3年10月16日(土)

～ 11月10日(水)

後期：令和3年12月22日(水)

～ 令和4年1月23日(日)

青森県の南西部は、弘前市、黒石市、平川市、西目屋村、藤崎町、大鰐町及び田舎館村の三市二町二村で構成され、中南津軽地域と呼ばれています。この地で生まれ育った多くの作家が郷里を舞台とした作品を多数残し、著名な文人が中南津軽地域を作品に描いて

目次

・令和3年度の予告……………	1
・特別展「中南津軽文学散歩」展示中止等について…	2
・作家×スポーツ展 開催報告……………	4
・高木彬光生誕100年展開催報告……………	5
・追悼 新谷ひろし氏寄贈資料展開催中、パネル展報告……………	6
・エクステンド常設展示「石坂洋次郎の著書」……………	7
・「三浦哲郎 ～師・井伏鱒二の思い出～」……………	7
・第19回青森県近代文学館川柳大会(誌上大会)……………	8
・全国文学館協議会共同展示報告……………	8
・日曜午後の朗読会報告……………	8
・資料寄贈者紹介……………	9
・館務日誌……………	12

います。
明治以降に中南津軽地域(旧・浪岡町を含む)を描いた文学作品を紹介しながら、近代文学から見たこの地域の持つ魅力に迫ります。

□「座標」に集った人々展

会期 令和4年2月26日(土)

～ 5月15日(日)

文芸雑誌「座標」は、昭和5(1930)年1月に創刊されました。竹内俊吉の提唱により、「黎明」や「猟騎兵」等、複数の雑誌が合流して成った県下統一の総合文芸誌でした。文学上の主張の相違により多くのメンバーが離脱し、昭和7年に廃刊となりましたが、本県文学史に確かな足跡を刻みました。
淡谷悠蔵らとともに「黎明」を創刊し、「座標」では編集人を務めた船水公明の旧蔵資料を中心に展示し「座標」に集った人々の活躍を振り返ります。

↳エクステンド常設展示

「文学県あおもり平成・令和編」

平成27年から12シーズンにわたり、常設展示作家の中の誰かに焦点を当て、コーナーを拡大する形を取ってきたエクステンド常設展示。13シーズンは少し趣を変えて「文学県あおもり平成・令和編」のテーマで臨みます。活躍中の県人作家をご紹介し、青森県の風土の中で作家の台頭が脈々と受け継がれている様子に迫ります。
会期は令和3年5月28日(金)から、約1年間の予定です。

青森県立図書館情報システム更新のため、令和3年11月11日(木)～12月21日(火)は休館となります。

休館中は、ご迷惑をおかけしますが、何卒ご理解・ご協力の程よろしくお願ひ申し上げます。

展示やイベントの予定が変更になる場合があります。最新情報は、ホームページまたは電話(017-733-9125)でご確認ください。

特別展「中津軽文学散歩」展示中止等について

コロナ禍を振り返って

■コロナ禍を振り返って 1

令和2年は「新型コロナウイルス感染症拡大防止」が大きなテーマでした。

2月下旬からイベントの自粛要請がなされ、全国すべての小学校、中学校、高等学校、特別支援学校について、臨時休業の要請がなされました。「三密の回避」「不要不急の外出の自粛」が呼びかけられる中、文学館でも、展示やイベントの在り方を見直さなければなりません。また、感染症対策として、消毒液とビニールシートの設置、ソーシャル・ディスタンシングのための掲示等を行うこととしました。

3月からイベントは中止することとなり、青森県近代文学館川柳大会、展示解説、日曜午後の朗読会も中止となりました。また、団体見学、出前講座も感染症拡大防止の観点からお受けすることができませんでした。

■特別展展示中止について

特別展「中津軽文学散歩」は、7月11日から9月22日まで開催する予定でした。

コロナ禍を振り返って

青森県の南西部は中津軽地域と呼ばれ、この地で生まれ育った多くの作家が郷里を舞台とした作品を数多く残しています。

文学碑も多く、藩政時代からの文化や伝統を礎とした文学活動が盛んな地です。特別展では、明治以降に中津軽地域(旧・浪岡町を含む)を描いた文学作品を紹介しながら、近代文学から見たこの地域の魅力を紹介する予定でした。

特別展の開催につきましては、来館される皆様、イベントに参加される皆様の安心・安全を守るかどうかが、最終的には、特別展「中津軽文学散歩」の展示とイベントは中止とさせていただきます。

自宅にいながらでも中津軽地域の文学散歩を楽しんでいただけるとの考え、図録は刊行することといたしました。

■図録「中津軽文学散歩」について



図録「中津軽文学散歩」は7月11日に刊行しました。

特別寄稿は、高橋弘希氏、斎藤三千政氏、館田勝弘氏、古川智映子氏、櫛引洋一氏にお願いしました。中津軽にまつわるエピソードや思い出が綴られた原稿、地域の魅力が伝わる原稿をお寄せいただきました。

高橋弘希 「送り火と火流し」

斎藤三千政 「北の文学連峰

津軽の文学者たちの絆」

館田勝弘 「弘前を訪れた文人たち

古川智映子 「吉川英治の文学碑」

櫛引洋一 「大鰐温泉、平川の

せせらぎ」

特別寄稿の次のページからは、弘前市、黒石市、平川市、西目屋村、藤崎町、大鰐町、田舎館村、旧・浪岡町の概要と、それぞれの地域にゆかりのある作品を掲載しています。掲載された中津軽地域にゆかりのある作品は次のとおりです。

【第一景 弘前市】

佐藤紅緑 「少年讃歌」

葛西善蔵 「酔狸州七席七題」

石坂洋次郎 「風俗」

長部日出雄 「津軽じょんから節」

太宰治 「津軽」

今官一 「弘前城」

田山花袋 「生」

安岡章太郎 「やり・へら・につこ」

今日出海 「弘前の花、京の花」

火野葦平 「風化地帯―自然と

闘ふ人々を捉へた新津軽紀行」

津川武一 「農婦」

大町桂月 「長慶天皇御陵参考地

堀川アサコ 「たましくる」

森沢明夫 「津軽百年食堂」

【第二景 黒石市】

秋田雨雀 「黒石魂」

鳴海要吉 「土にかへれ」

秋田雨雀 「おそのと貞吉」

若山牧水 「南津軽板留温泉雑詠」

船水清 「苦悩の歌人丹羽洋岳」

沙和宋一 「民謡ごよみ」

作間雄二 「五つの章よりなる戯曲

津軽謀叛人始末 浅瀬石残党異聞」

高橋弘希 「送り火」

【第三景 平川市】

新田次郎 「八甲田山死の彷徨」

古川智映子 「氷雪の碑」

高浜虚子の詠句 「代馬は大きく

津軽富士小さし」

長部日出雄 「津軽世去れ節」

長谷川伸 「相馬大作と津軽頼母」

葛西善蔵 「馬糞石」

石坂洋次郎 「河鹿館」

【第四景 西目屋村】

竹内俊吉 「海峡」

根深誠 「暗門川流域」

福井次郎 『暗門の祈り』

【第五景 藤崎町】

森勇男 「唐糸御前」
長部日出雄 「消えた城塞」
津川武一 「農婦」

【第六景 大鰐町】

佐藤紅緑 「復讐」
増田手古奈 「虚子先生を お迎へして」
小山正孝 「大鰐 石川 穴の話」

【第七景 田舎館村】

司馬遼太郎 「劇的なコメ」
鈴木喜代春 「弥生の村」を探し つづけた男
猿不次男 「津軽の鷹・為信公」 一代記 津軽太平記
鈴木喜代春 「できたよ、ぼくたち のねぶた」

【第八景 旧・浪岡町】

長部日出雄 「浪岡城」
中山義秀 「吹雪の涯に」
平井信作 「生柿吾三郎の 税金闘争」
阿部誠也 「燃える津軽 小説 津川武一」

図録のカラーページでは、次の資料の画像を掲載しています。

【原稿】

葛西善蔵 「姉を訪ねて」
石坂洋次郎 「続石中先生行状記 無銭旅行の巻」
長部日出雄 「迷路の感覚― ぼくの弘前」

【歌幅】

大町桂月 「四方八方の千万の山を見 おろして心にかゝる雲もなまかな」

【屏風】

竹久夢二 「定めなく鳥やゆくらむ 青山の青の寂しさかぎりなければ」

【色紙】

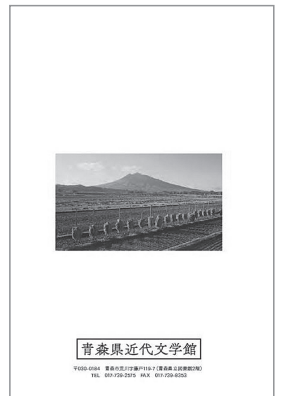
高木恭造 「故郷モイマ雪ア降てる べなア」
増田手古奈 「山の湯や夕鶯の いつまでも」
秋田雨雀 「家もなまわがふるさとの なつかしさ」

丹羽洋岳 「水上の櫛ヶ峰早やも 雪白みとらえし岩魚さびて細りぬ」

後藤蝶五郎 「目を閉じて灰色も よき色のうち」

【句幅】

他にも、中南津軽地域を描いた作品群を、サトウユウジ氏撮影の写真とともに掲載しています。



図録『中南津軽文学散歩』につきまして、詳しくはホームページ (<https://www.plib.pref.aomori.lg.jp/viewer/info.html?id=476>) をご覧いただくか、電話(〇一七―七三九―二五七五)でお問い合わせください。

なお、「中南津軽文学散歩」は、令和3年度の企画展として開催することとしております。皆様のご来館をお待ちしております。

■コロナ禍を振り返って 2

令和2年に、新しく始めた取り組みもあります。フェイスブックでは、3月8日から

【おうちで文学館】企画を開始しました。「不要不急の外出の自粛」が呼びかけられる中、外出を控えている方々に向けて、フェイスブック上で「作家×スポーツ展」の展示資料を紹介しました。また、期間限定で展示パネルをPDFファイルでご覧いただけるようにしました。

7月からは、イベントが再開され、イベントの参加者には、検温と連絡先

のご記入をお願いし、人数制限を行いながら実施しています。従来の展示解説は、展示室内で参加者と対話をしながら行っていました。現在は参加人数に応じて解説会場を変え、参加者同士の間隔を十分にとった上で行っています。団体見学の場合は、事前に代表者の方とよく相談させていただき、グループごとに時間をずらして解説をするといった工夫をしています。

10月からは、企画展「ミステリーの魔術師 高木彬光生誕100年展」が開催され、入館時の検温を全員にお願いし、順路を設定することで観覧者がすれ違う機会を減らしました。日曜講座は事前申込制とし、当日体調がすぐれない場合についてのお話を事前にさせていただきました。これらの対策は、現在開催中の企画展「追悼 新谷ひろし氏寄贈資料展」でも継続しています。

令和3年3月7日に実施する予定であった第19回青森県近代文学館川柳大会は、誌上大会として実施することとなりました。誌上大会は初めての試みでしたが、全国からの154名の参加があり、457句の投句がありました。

今後も試行錯誤は続いていくと思います。皆様にはご不便等おかけしますが、引き続き、ご理解・ご協力をいただきますようお願いいたします。

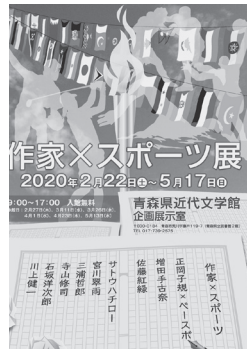
(蛭名良一、青森県近代文学館室長)

「作家×スポーツ展」
開催報告

会期 令和2年2月22日(土)

5月17日(日)※

※新型コロナウイルスの感染症拡大防止のため、4月24日(金)から展示最終日まで臨時休館となりました。



1964年、オリンピックが東京で開催されました。東京オリンピックは、アジアで初めて開催されたオリンピックであり、スポーツ界のみならず、作家たちにも強いインパクトを与えました。

本展では、東京オリンピック・パラリンピック2020に先駆け、青森県近代文学館が所蔵する「作家とスポーツ」にまつわる資料」を展示しました。

また、スポーツに熱中した作家たちのエピソードや、青森ゆかりの作家たちがスポーツをどのように観て、描いたのかについてご紹介しました。

▽第1部 近代スポーツのはじまり

作家×運動会

近代スポーツは、明治時代に富国強兵・殖産興業のために外国人教師が登用されたことで、広まってきました。溝口春

翠が描いた軍事教練のような運動会、夏目漱石が描いた陸上競技会のような運動会、太宰治が描いたピクニックのような運動会を経て、現代のような運動会になる変遷をパネルでご覧いただきました。

▽第2部 スポーツに熱中した作家たち

プレイヤーとして、観戦者として、スポーツに熱中した青森ゆかりの作家たちのエピソードを紹介しました。第2部の作家たちは、生年月日の順ではなく、その作家がそのスポーツに熱中していたであろうという順に紹介しました。

- 1 正岡子規×ベースボール
- 2 増田手古奈×野球
- 3 佐藤紅緑×野球
- 4 サトウハチロー×野球
- 5 宮川翠雨×水泳
- 6 三浦哲郎×バスケットボール
- 7 寺山修司×ボクシング・野球
- 8 石坂洋次郎×ゴルフ
- 9 川上健一×野球・ゴルフ

この順にスポーツに熱中した青森ゆかりの作家たちのエピソードを辿っていくと、「野球」という日本語ができる前から、日本にベースボールが持ち込まれた時代から、熱血野球小説が大ヒットし、「スポーツ小説」というジャンルが誕生する時代へと変遷していく様子を見ることができました。また、宮川翠雨が水泳選手

の頃は、青森県にはプールがなく、大会は海で開催されていました。バスケット

ボールで「ハヤブサの哲」と呼ばれた三浦哲郎は、物資がない中、地下足袋とい

びつなボールで練習し、全国大会3位入賞を果たしました。プロ野球選手を夢見ていた川上健一は高校時代、剛速球のエースとして活躍していました。

「スポーツに熱中した作家」といっても、スポーツ少年でスポーツ作品を書いた作家、スポーツ観戦が好きな作家、大会に出場した作家、少年時代はスポーツが苦手で晩年になってからスポーツを楽しんだ作家、と様々なタイプが見られました。



▽第3部 描かれるスポーツ

第3部では、青森ゆかりの作家たちのスポーツ作品、伝記、エッセイが掲載された著書や関連資料等を種目別に紹介しました。

・陸上競技・野球・ボクシング・バスケットボール・自転車・柔道・ヨット・ボート・ラグビー・登山・テニス・ゴルフ・スキー・スケート・アイスホッケー・カーリング

▽第4部 作家が見た東京五輪

作家×オリンピック1964

1964年の東京オリンピックは「筆のオリンピック」と言われるほど、多くの作家らが、新聞・雑誌に寄稿しました。

テレビの普及により、多くの人が中継でオリンピックを見られるようになった時代、時間差の生じる新聞・雑誌には付加価値が必要との考えから、作家の個人的な文章が求められたようです。

第4部では、作家たちのオリンピック観戦記をパネルにし、1964年の東京オリンピック開催時の資料・記事を紹介しました。

臨時休館日を除いた57日間の会期中、一七三〇名の方にご覧いただきました。スポーツウェアを来たお客様や、スポーツバックを下げた学生の方にも足を運んでいただきました。

5月10日に予定されておりました日曜講座「作家×オリンピック」は新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、中止となりました。また、展示解説も3月から6月まで実施することができませんでした。楽しみにされておりました皆様には、大変申し訳ございませんでした。コロナ禍の中、令和2年3月から「おうちで文学館」企画を開始しました。SNS(フェイスブック)を活用し、「作家×スポーツ展」の展示資料について紹介したり、期間限定で「スポーツに熱中した作家たち」のパネルをPDF化したりし、外出を自粛している方々に向けて、少しでも文学館の展示や作家のエピソードを楽しんでいただけるように工夫しました。

(武永佐知子、文学専門主査)

「ミステリーの魔術師
高木彬光生誕100周年展」
開催報告

会期 令和2年10月24日(土)
〜 令和3年1月11日(月・祝)

ミステリーの魔術師
高木彬光生誕100周年展

2020年 10.24日〜
2021年 1.11日(祝)

開館時間 9:00〜17:00
入場無料

会場 青森県近代文学館

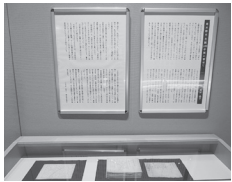
休館日 11月11日(祝)、11月12日(月)・12月31日(木)
12月31日(木)・1月1日(金) 休館日

TEL: 017-726-2575
〒036-0134 青森県青森市青森1-11-1 青森県庁本庁舎1階

大正9(1920)年青森市に生まれた高木彬光の生誕100年という節目に当たり、当館で収蔵している彬光の直筆資料・図書・雑誌、そして彬光の旧蔵図書を展示し、その生涯と作品を紹介しました。

彬光は昭和23(1948)年、古い師の助言で初めて書いた小説「刺青殺人事件」が江戸川乱歩の眼にとまり、「ミステリー界にデビューします」。

展示室最初のケースには、藁半紙に書かれたデビュー作「刺青殺人事件」の草稿を展示しました。高木晶子氏(高木彬光長女)には、本展のために「高木彬光生誕100年展に寄せて」と題して寄稿していただきました。



『随筆・探偵小説』を読むと、「探偵小説」にかけてのこだわりがひしひしと伝わってきます。探偵・神津恭介は、デビュー作「刺青殺人事件」から登場し、彬光が生み出した主人公の中で、最多の登場数を誇り、明智小五郎、金田一耕助とともに日本三



第1部では、高木彬光の生涯を、当時のエピソードとともに紹介しました。彬光は晩年に、師である江戸川乱歩・横溝正史、そして親友である山田風太郎について書き残したいと言っていたそうです。三人とのエピソードをパネルで紹介しました。新収蔵資料として、『江戸川乱歩先生華甲記念文集』、「少年少女譚海」、『探偵王』、『騎形の天女』(山田風太郎・島田一男・岡田鱈彦・高木彬光の連作「十三の階段」収録)等を展示しました。

第2部では、当館に収蔵している、彬光の推理小説の著書をほぼすべて展示しました。彬光が生み出した探偵役の初登場シーンや、推理小説のジャンルについてパネルで紹介しながら、膨大な推理小説と、何度も出版された作品の数々をご覧いただくことができました。

大名探偵の一人に数えられています。私立探偵・大前田英策は、昭和31年から登場。柔道や空手、合気道の達人で、鋭い直感で犯罪をかぎつけます。

昭和32年、古い師に募参りに行くようにすすめられ、彬光は青森に向かいます。列車が途中で立ち往生したことが、歴史推理小説「成吉思汗の秘密」執筆のきっかけとなりました。「成吉思汗の秘密」が雑誌に掲載される際、乱歩は「日本ではじめての本格的ベッド・ディテクティブ」と紹介しました。

昭和34年、彬光は経済推理小説「人蟻」『黄金の死角』(単行本出版時「白昼の死角」と改題)を発表しました。作品の執筆にあたり、経済関連の法律を徹底的に研究したといえます。『白昼の死角』の主人公にはモデルがいます。彬光は、その男の運命を見届けるために裁判所へ通いつめました。この裁判所通いが、のちに『破戒裁判』『誘拐』等の裁判推理作品、法廷推理作品を産む動機となっていました。この頃から、弁護士・百谷泉一郎や、検事・近松茂道、検事・霧島三郎が活躍する推理小説が多く執筆されました。

昭和45年からは、ミステリアスなアナリスト・墨野隴人が登場します。

他にも、時代小説や児童向け作品、彬光の旧蔵図書を展示しました。多数執筆された古い関連の著書については展示室を飛び出し、パネルにして紹介しました。

「探偵小説の興味は、善と悪との対立である。」と述べた彬光は、国内外のトリックを分析し、数々の画期的なトリック

クを創り出しました。一方で、フェアプレイにこだわり、合理的で理論的な謎解きを考え続けました。日本では前例がないことにも果敢に挑み、「先駆的」や「傑作」と評されるような作品を世に送り出しています。壁に突き当たるような思いを何十回と味わいながら、本格推理、探偵推理、歴史推理、経済推理、法廷推理と、ミステリーの可能性を模索し続けた彬光の作品からは、執念のような情熱を感じずにはいられませんでした。

11月15日の日曜講座「高木彬光と乱歩・正史・風太郎」は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、事前予約制・先着30名様といたしました。予約開始から1週間もたたないうちに満席になりました。急遽同じ日にもう一度実施することとし、お申し込みいただきました方にご案内いたしました。最終的には48名の方に参加いただきました。

総資料点数は628点、二一五八人の方が足を運んでくださいました。

(武永佐知子、文学専門主査)

11月15日の日曜講座「高木彬光と乱歩・正史・風太郎」は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、事前予約制・先着30名様といたしました。予約開始から1週間もたたないうちに満席になりました。急遽同じ日にもう一度実施することとし、お申し込みいただきました方にご案内いたしました。最終的には48名の方に参加いただきました。

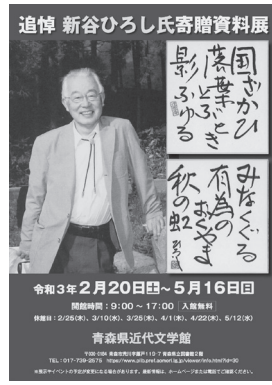
総資料点数は628点、二一五八人の方が足を運んでくださいました。

(武永佐知子、文学専門主査)



「追悼 新谷ひろし氏寄贈資料展」
開催中

会期 令和3年2月20日(土)
～5月16日(日)



この企画展は当初「新谷ひろし氏寄贈資料展」のタイトルで開催する予定で準備を進めていましたが、新谷氏は令和2(2020)年9月29日に満89歳で逝去されました。新谷氏は、かつて青森に俳句の文学館を作りたいという夢を抱き、収集に取り組まれた俳人であり、数多くの資料を当館に寄贈してくださいました。思い出されます。そこで、タイトルは「追悼 新谷ひろし氏寄贈資料展」と改め、新谷氏を偲び、その寄贈資料の中から青森俳句に関する貴重な数々を紹介するという趣旨で開催することといたしました。

昭和5(1930)年に南津軽郡大杉村(現・青森市)で生まれた新谷氏は、昭和22年に青森俳句会に入会し俳誌「暖鳥」に参加。後に同誌の編輯人、さらには主宰を務めました。昭和34年には青森県俳句懇話会の初代事務局長に就任。その後『飛礫の歌』や『大釋迦峠』等の句集を刊行し、昭和60年には青森県現代俳句協会の初代会長となりました。平成18

(2006)年の「暖鳥」終刊後は、新たに俳誌「雪天」を創刊し、亡くなるまで主宰を務められました。以下、展示の構成と主要な資料を列記します。

- 第1部 俳人・新谷ひろし氏の歩み
- ・『美貌妻』等、新谷氏の句集計16冊
- ・書幅「鱈一本北方の空の縞持てり」等、新谷氏揮毫の書画計10点
- ・新谷ひろし宛寺山修司葉書2通

第2部 諸家の色紙・短冊

- ・「暖鳥」に参加していた俳人：吹田孤蓬色紙「玫瑰の実となり明日をうたがわず」、千葉青美色紙「運命やからくれなゐの唐辛子」、成田千空色紙「起き上り小法師われや冬の虹」、西沢赤子色紙「冬山の宙空猛禽らしきもの」、米田「穂色紙」「雉子の綺羅に逢へり教師の終ひの帰路」、豊山千蔭色紙「蟹の缺が硝子を擦って満月なり」等計52点
- ・その他の俳人：藤原柯芳短冊「武装なき国土讀へて花見人」、高松玉麗短冊「心の扉ひらくよ月光沈丁花」、増田手古奈短冊「はるかにも又驚の谷わたり」、工藤汀翠色紙「母の忌の花となりたる茗荷ほる」等計23点

第3部 遺品及び句碑関係資料

- ・アルバム「暖鳥句碑の径(五十音順)」
- ・暖鳥・埋雪庵関係印章等一式
- ・二三翠峰書幅「雪天」
- ・高濱虚子句稿額「立秋」

(竹浪直人、文学専門主幹)

パネル展 開催報告

新たに「今官一生涯100年展」、「作家×スポーツ展」、「大庭れいじの世界」、「関東大震災と葛西善蔵」を製作しました。コロナ禍で、イベントの中止が相次いでおりましたが、教育現場等からパネル展を活用したいというご相談をいただき、ご利用いただきました。

また、昨年度に引き続き、パネル展主催者のご希望により、パネル展情報をつエイスブックにて発信できるようにしました。



パネル展の実施会場・開催期間は次のとおりです。

- ◇「作家×スポーツ展」パネル展
中泊町図書館
令和2年6月9日～6月21日
弘前学院聖愛中学高等学校
令和2年7月18日
青森大学
令和2年10月3日～10月4日

◇「大幸治生誕100年特別展」パネル展
青森県立弘前中央高等学校
令和2年7月17日～7月18日
青森県立弘前南高等学校
令和2年8月24日～12月10日

◇「大町桂月が描いた青森」パネル展
青森県立北斗高等学校
令和2年10月5日～10月13日

◇「大庭れいじの世界」パネル展
青森県高等学校文化連盟文芸部
八戸ポータルスタジアム はっち
令和2年10月22日～10月24日

◇「平成の青森文学」パネル展
青森県高等学校文化連盟文芸部
八戸ポータルスタジアム はっち
令和2年10月22日～10月24日

◇「竹内俊吉生誕110年展」パネル展
つがる市立図書館
令和3年1月1日～3月21日



エクステンド常設展示
「石坂洋次郎の名著」開催報告

会期 令和2年5月29日(金)
～11月25日(水)



体どのような時期に刊行されたのか、容易に参照できる形を取りました。ケース②では『金魚』と『麦死なず』の単行本を、ケース③では『若い人』や『何処へ』の単行本を展示。ケース④では『わが日わが夢』と『青い山脈』の単行本をそれぞれ複数冊展示しました。特に新潮社刊行の『青い山脈』は、風景画を表紙とした初版本(昭和22年)と女性の人物画が表紙となった第9刷(昭和24年)とを展示し、中国語の翻訳本である『緑色の山脈』も合わせて紹介しました。

平成27年度から回を重ねてきたエクステンド常設展示、シリーズ第11弾は「石坂洋次郎の名著」というテーマで実施しました。弘前市生まれの作家・石坂洋次郎の生涯120年という節目に当たり、その膨大な量の著作の中から、主要なもの96冊をピックアップして展示しました。

導入に当たるケース①では、「石坂文学の全体像を示すべく、昭和41年から翌年にかけて新潮社から刊行された『石坂洋次郎文庫』全20巻を、外函の表面が見える状態で並べました。文庫とは言いながら、石坂の著名作品をことごとく網羅した全集に近い存在のもので、各巻の帯には収録作品の一場面を想起させるイラストと魅力的な紹介文が掲載されています。残念ながら全20巻のうち、第2巻『若い人』の帯だけは展示することができませんでした。

基本的な構成としては、各ケースの後ろに『石坂洋次郎略年譜』のパネルを置き、ケース内の単行本が石坂の生涯のうち一

エクステンド常設展示
「三浦哲郎〜師・井伏鱒二の思い出〜」開催中

会期 令和2年12月4日(金)
～令和3年5月23日(日)



八戸市に生まれた三浦哲郎は、早稲田大学文学部仏文科在学中に仲間と創刊した同人雑誌「非情」をきっかけに、小沼丹を介して井伏鱒二と面会。後に井伏鱒二に師事することになります。昭和36(1961年)「忍ぶ川」で芥川賞を受賞し、本格的な作家生活に入ると、多くの文学賞に輝きました。

常設展示室の三浦哲郎コーナーを拡大し、筑摩書房『井伏鱒二全集』(平成9年〜10年)月報に掲載された「師・井伏鱒二の思い出」を紹介しながら、当館収蔵の関連資料約30点を展示しています。

【井伏鱒二「久慈街道」書き出し】
昭和31年、三浦は井伏の歴史紀行文執筆のため、久慈街道の取材旅行を手配しました。「久慈街道」の書き出しは、雑誌掲載時から時が経つにつれて井伏の手による推敲がなされています。

「石手県の三浦君といふ人から」
「石手県に帰省中の三浦哲郎君から」
「青森県に帰省中の三浦哲郎君から」
三浦は「師・井伏鱒二の思い出」五(『井伏鱒二全集 第五巻』収録)に次のように書いています。

「私は、先生の『七つの街道』がなにかの文学全集に収録される機会がくるのを、心ひそかに待ち望んでいた。今度は、先生は自分をどんなふう書いてくださるだろうかという楽しみを抱いて。けれども、先生が御自作に朱筆を入れられる機会は、思えば胸が裂けそうに悲しいことだが、もはや永久にやっつけない。」

展示室では「久慈街道」が掲載された雑誌「別冊文藝春秋」第53号(初展示)と、「久慈街道」推敲の過程がわかる図書を展示しています。

【原稿「将棋盤」】
随想「将棋盤」は、「風報」第9巻第6号(昭和37年6月1日)に掲載されています。

初展示資料の直筆原稿「将棋盤」1枚目に「私は、将棋の指し方は子供のころから知っていたが、早稲田の学生時代、井伏先生や小沼先生のお宅へ伺うようになってから、ひんぱんに指すようになってきた。」と書かれています。

3月26日からは6、7枚目を展示しています。この機会にぜひご覧いただきたい資料です。

第19回青森県近代文学館川柳大会(誌上大会)「3・11文学館からのメッセージ」報告

令和3年3月7日(日)に開催を予定していた、第19回青森県近代文学館川柳大会は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から当日の大会開催を中止とし、宿題のみの誌上大会といたしました。

なお、今大会は、全国文学館協議会第9回共同展示「3・11文学館からのメッセージ」の関連事業とし、パネル展「災害と日常―第19回青森県近代文学館川柳大会―」と題して令和3年2月26日(金)から3月24日(水)まで開催いたしました。

今大会は誌上大会ということもあり、県内外から、例年を大きく上回る、154名の参加があり、のべ457句の川柳が寄せられました。今大会の宿題は「コロナ」「未来」「揺れる」でした。誌上大会という、初の形式で行われた大会で、至らぬ点もあったかと存じますが、参加された皆様、選者の皆様のおかげで大会を滞りなく開催することができました。深く感謝申し上げます。

【特選受賞作】
宿題「コロナ」夏草ふぶき選
終息にひとときわ高く祭り笛

佐藤雅秀

宿題「コロナ」長利冬道選
コロナ禍に地球のくしゃみ止まらない
山野茶花子

宿題「コロナ」山本弘志選
生き方の問いだったのか新コロナ
千葉かほる

宿題「未来」田中 薫選
永遠にこの地に咲いてみたいもの
太田キヌエ

宿題「未来」綿谷夕雨子選
茜雲そこなら明日が見えますか
小野五郎

宿題「未来」高森一吞選
未来つて心の翼かも知れぬ
岩崎雪洲

宿題「揺れる」潤子選
ジュニアでもシニアでもない心太
三浦敬光

宿題「揺れる」成田我楽選
いちめんの葉の花しあわせへ揺れよ
坂本真里

宿題「揺れる」野沢省悟選
十年を経てもいまだに揺れている
木村美映

【川柳大会総評】

コロナ禍の中、昨年の大会は中止となり、今年の大会は誌上大会となった。そして、今年3・11より10年の節目でもある。全国文学館協議会第9回共同展示「3・11文学館からのメッセージ」の関連事業として当館では「災害と日常」をテーマとして、応募された川柳作品の特選秀句をパネル展示することとした。誌上大会は初めての試みで不安もあったが、県内外より154名の応募があり、また、質の高い作品も多く、喜ばしい結果となった。応募された皆様、そして選者の方々に深く感謝申し上げます。

〈ジュニアでもシニアでもない心太〉
〈いちめんの葉の花しあわせへ揺れよ〉
〈十年を経てもいまだに揺れている〉。
3・11から10年、個々人の時の流れが揺れ、葉の花の輝きに「揺れよ」と祈る。そしていまだに揺れ続ける人々、社会、そして日本。〈終息にひとときわ高く祭り笛〉〈コロナ禍に地球のくしゃみ止まらない〉〈生き方の問いだったのか新コロナ〉。終息を願う祭り笛、地球全体に広がるコロナ。そのコロナは人々に生き方を問う。〈永遠にこの地に咲いてみたいもの〉〈茜雲そこなら明日が見えますか〉〈未来つて心の翼かも知れぬ〉。永遠に咲く花を思い、茜雲に心を寄せる。その心にある翼こそが未来だという励まし。まさに川柳による今を生きる人間を活写した作品群である。

(野沢省悟、青森県近代文学館文学資料調査員)

日曜午後の朗読会報告

今年度は「夢」というテーマで、全6回の朗読会を予定していましたが、第1回寺山修司『かもめ』と、第2回北畠八穂『明りになったかたつむり』は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から中止となりました。人数制限、検温、連絡先のご記入をお願いしながら、のべ13名の方にご参加いただきました。

- ③8月30日 太宰治『津軽』
- ④9月27日 石坂洋次郎『陽のあたる坂道』
- ⑤10月25日 高木彬光翻訳『フランケンスタイン』
- (メアリー・シェリー原作)

- ⑥11月22日 三浦哲郎『拳銃と十五の短篇』より

フェイスブック継続中

今年度は、新型コロナウイルスの感染症拡大に伴い、フェイスブックを活用して迅速に情報を発信しました。また、【おうちで文学館】企画を開始し、くまきちが展示室や展示資料を楽しくレポートしました。



資料寄贈者紹介

次の方々から資料を寄贈していただきました。誠にありがとうございました。今後とも当館へのご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。
また、代表者の変更、住所変更等がございましたら、お手数ですが、ご連絡いただけたらと思います。

(敬称略・五十音順)

今期のご寄贈(令和2年1月～12月)

- 青森県観光連盟―「あおもり教育旅行ガイドブック 2020」
- 青森県川柳連盟―「青森県川柳年鑑 ねぶた」第1集 二冊
- 青森県俳句懇話会―「青森県句集」第31集
- あおもり県民カレッジ事務局―「てのひら」第69号
- 青森県民文化祭文芸コンクール実行委員会―「文芸コンクール入選作品集 2020」
- 青森文芸出版―『千空研究』合本』他図書二冊
- 青森ペンクラブ―「北の邊」創刊号他雑誌七冊
- 尼崎市文化振興財団―『文芸作品集』令和元年度
- 新谷勉―新谷ひろし関係資料一式
- 一茶記念館―『小林一茶百九十四回忌 全国俳句大会作品集』
- 今泉佳子―『石坂洋次郎文庫2 若い人』他図書三冊
- 内海宏隆―『野上彰ノオトVol.11』
- 梅内美華子―『日本の美しい言葉辞典』
- 柘出版社―「趣味の文具箱」Vol.54
- 遠藤周作文学館―『遠藤周作珠玉のエッセイ展』
- 大岩直人―「コミュニケーション科学」第51号 他図書二冊
- 大串靖子―『沙羅の花』
- 小笠原茂介―『幻の白鳥』二冊
- 奥田卓司―『夏潮』二冊
- 小熊健―鹿地亘宛秋田雨雀書簡二通 他雑誌三冊
- かごしま近代文学館・メルヘン館―『海音寺潮五郎寄贈特別資料目録(原稿編)』
- 神奈川近代文学館―『大岡昇平の世 界展』
- 鎌倉文学館―『川端康成 美しい日本』他図書一冊
- 神谷直樹―『楽器病棟』二冊
- 雁部貞夫―『わがヒマラヤ』
- 北九州市立松本清張記念館―『E・A・ポーと松本清張』他図書一冊
- 木立徹―『希望』他図書三冊
- 橋川まもる―宮川翠雨及び本県著名作家関係資料一式
- 久慈きみ代―「戯曲『毛皮のマリー』スタートの風景』二冊
- 熊本学園大学付属海外事情研究所―『イリーナさんというひと』
- 黒高句会―『黒高句会自選十句集』第十二集
- 群馬県立土屋文明記念文学館―『詩とは? 詩人とは?』他図書三冊
- K&Kプレス―『筆一本で権力と闘いつづけた男 陸羯南』他図書一冊
- 高志の国文学館―『家持を伝える』
- 小諸・藤村文学賞事務局―「第26回小諸藤村文学賞入選作品集」
- 坂本史範―『歌集 菜の競り』他図書一冊
- さくら市ミュージアム―『自然歌人 高塩背山』
- 桜庭和浩―「作品」(1-1) 他雑誌六冊・図書五冊
- 思潮社―「現代詩手帖」(63-7)
- 秀明大学出版会―『太宰治 単行本にたどる検閲の影』
- 雪天俳句会―『雪天(俳句同人誌)』(1-1)
- 仙台文学館―「特別展 斎藤茂吉」他図書一冊
- 高木晶子―「琥珀色のひとりごと」他図書一冊
- 高木保―「青森日報」(大正11年10月23日)他 戦前の新聞九部
- 高橋克子―「高橋明雄資料目録」
- 高橋道子―「みちのく春秋」他雑誌三冊・図書二冊
- 竹浪和夫―『みちのく春秋』叢書』第二巻
- 竹浪克夫―『石路の花』
- 鬣の会―「鬣」第77号
- 田中良彦―「研究集録」第六十号
- 短歌結社「草の会」―「令和元年度歌会詠草集『異国の風鈴』二冊
- 潮音社―『歌集 紫草』
- 寺内敏夫―佐藤紅緑原稿「名士と年齢」
- 藤樹社―「書道界」通巻364号
- 徳島県立文学書道館―「現代詩歌の冒険」他図書一冊
- 栃木県立美術館―「山田耕柁と美術」
- 鳥羽市教育委員会生涯学習課―「三島由紀夫と神島」
- 富山県芸術文化協会―「とやま文学」第三十八号
- 長良川画廊―「長良川画廊の現在と未来」
- 西田哲雄―小国英雄「シナリオ」『テムチン』(チンギスカン) 二冊』コピー一式
- 仁科源一―『べっこ』と「ひろっこ」と親しい人達と私の詩』
- 日本歌人クラブ―『2020年版 現代万葉集』他図書一冊
- 日本現代詩歌文学館―『われ、敗れたり』
- 日本武道館―「月刊 武道」令和2年3月号
- 野沢省悟―「ねぶた」合本十五冊
- 野良生治―『詩集 昭和挽歌』
- 八甲田神社―「小笠原壽久翁 評伝」二冊
- 姫路文学館―「俳人 永田耕衣展」他図書二冊
- 弘前学院大学地域総合文化研究所―『地域学』十六巻
- 弘前市立郷土文学館―『岩木山と文学』
- 深澤茂樹―「日本未来派」二二九号 他図書四冊・雑誌一冊
- 福士光生―『未完、この大いなるもの』二冊

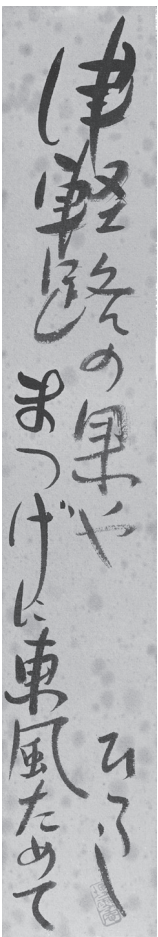
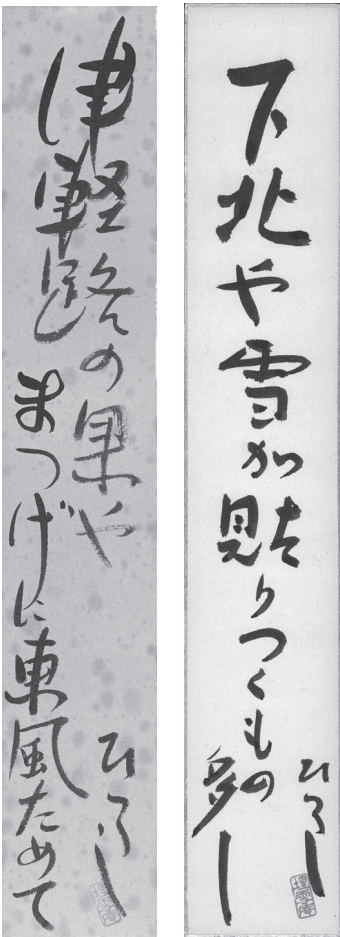
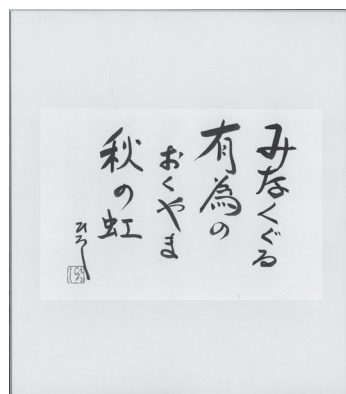
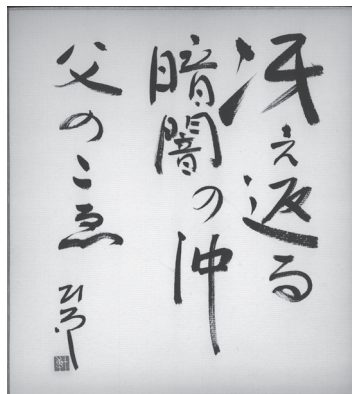
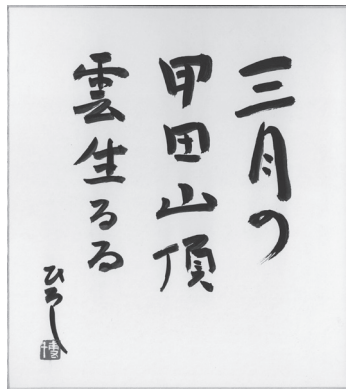
- ふくやま文学館―『井伏鱒二の書画』他図書一冊
- 藤田晴央―『早稲田大学新聞』第819号・第821号他図書一冊・雑誌七冊・特殊資料一点
- ふらんす堂―『続・詩人のポケット』二冊
- 文京区立森鷗外記念館―『森家の歳時記』他図書二冊
- 北海道立文学館―『砂澤ビッキの詩と本棚』他図書二冊
- 堀江秀史―『寺山修司の一九六〇年代』
- 前橋文学館―『和合亮一展』
- 松丘保養園松桜会―『歌集 青葉かがやく』
- 松山市子規記念博物館―『子規の写真物語』他図書一冊
- 道尻誠助―『満満満』
- 武者小路実篤記念館―『友情』発表100年記念事業の記録』
- ものの芽舎―『あおもりのき』創刊号
- 山内恭子―『那妣久祁牟里』
- 山梨県立文学館―『まるごと林真理子展』
- 山本隆悦―『下北の文学・下北と文学2』
- 吉崎光一―『北狄』390
- 吉村昭記念文学館―『戦後75年 戦史の証言者たち』
- 論創社―『黒魔王』他図書一冊
- 継続的な寄贈
- 會津八一記念館―『雁魚來往(八)』
- 青嶺俳句会―『青嶺』
- 青森アララギ会―『青森アララギ』
- 青森県歌人懇話会―『青森県歌集』
- 青森県教育厚生会―『三潮』
- 青森県現代俳句協会―『青森県現代俳句年鑑』
- 青森県詩人連盟―『青森県詩集 青森』
- 青森県詩人連盟会報 海峡』
- 青森県川柳連盟―『青森県川柳連盟だより』
- 青森県退職高等学校校長会(さつき会)―『さつき会たより』
- 青森県長寿社会振興センター―『あすなろ倶楽部』
- 青森古今短歌会―『青森古今』
- 青森文芸出版―『あおもり文芸さろん』
- 青森ペンクラブ―『北の邊』
- あしかげ社―『蘆光』
- 一戸恵多―『飾画』
- 井上靖研究会―『井上靖研究』
- 小笠原茂介―『第三次 ERA』
- おかじょうき川柳社―『おかじょうき』
- 小田桐妙女―『俳句鼎 妙』
- 小山正見―『感泣亭秋報』
- 河口俳句会―『河口』
- 風詩社―『詩誌 風』
- 金沢文化振興財団―『研究紀要』
- 「神津恭介ファンクラブ」事務局―『らんだの城通信』
- 神谷直樹―『詩誌 六番目の母音』
- さじ鳩俳句会―『さじ鳩』
- 陸羯南会―『陸羯南会誌』
- 国原社―『国原』
- 黒艦隊―『俳句同人誌 黒艦隊』
- 薫風発行所―『薫風』
- 群馬県立土屋文明記念文学館―『群馬県立土屋文明記念文学館紀要』
- 月刊弘前編集室―『月刊「弘前」』
- 国際芸術センター青森―『AC2』
- 越谷市立図書館―『野口富士文庫 第二十二号』
- 五所川原俳句会―『五所川原俳句会会報』
- 小山弘明―『光太郎資料53』『光太郎資料54』
- 佐々木宏一―『エアツェーレ』
- 笹田かなえ―『川柳カモミール』
- さわらび短歌会―『さわらび』
- 此岸俳句会―『詩誌「此岸」季刊誌 此岸』
- 清水雪江―『千青』
- 紫明の会―『紫明』
- 下北文化社―『下北文化』
- 洪柿園俳句会―『洪柿園』
- 詩霊の会―『詩霊』
- 雪天俳句会―『雪天』
- 全国文学館協議会事務局―『全国文学館協議会紀要』
- 川柳「風の会」―『風紋』
- 川柳触光舎―『触光』
- 川柳ゼミ 青い実の会―『青い実』
- 「青のメモリー」
- 川柳塔みちのく―『川柳塔みちのく』
- 外海吟社―『外海』
- 泰斗舎―『あおもり芸術鑑賞友の会 文化情報誌 びーち』
- 高山市生涯学習課―『高山市近代文学館調査・研究報告書』
- たかなな発行所―『たかなな』
- 潮音社―『潮音』
- 童子津軽句会―『津軽通信』
- 中原中也記念館―『中原中也研究 第二十五号』
- 成田本店―『青春と読書』『図書』『波』
- 新美南吉記念館―『研究紀要』
- 仁科源一―『斜坑』
- 西脇巽―『青森文学』
- 日本近代文学館―『日本近代文学館年誌』
- 日本現代詩歌文学館―『日本現代詩歌研究』
- 日本民主主義文学会弘前支部―『弘前民主文学』
- hashomado―『本のパーキング』
- はちのへ川柳社―『川柳うまっご』
- 八甲田川柳社―『川柳八甲田』
- 波濤短歌会青森支部―『波濤青森』
- 波止場の会―『波止場』
- パブリック・ブレイン―『Day Art』
- 帆風美術館―『風』
- 弘前川柳社―『川柳「林檎」』
- 弘前大学国語国文学会―『弘前大学国語国文学』
- 弘前文芸協会―『文芸弘前』
- 弘前ペンクラブ―『弘前ペンクラブ ニュース』
- 福田正夫詩の会―『焰』
- ふだん記津軽グループ―『ふだん記 津軽』
- 文藝軌道の会―『文藝軌道』
- 北苑歌話会―『北苑』

- 北狄社―「北狄」
- 松丘保養園松桜会―「甲田の裾」
- 無名群社―「無名群」
- 村次郎の会―「風の軌跡 村次郎」通信
- 森英一―「イミタチオ」
- 森の座青森支部―「未来」
- 森の座発行所―「森の座」
- 山梨県立文学館―「資料と研究」
- 悠短歌会―「悠」
- 「樸」俳句会―「樸」
- 吉田徳壽―「八戸PEN」
- 青森県総合社会教育センター
- 旭川文学資料友の会
- 池波正太郎記念文庫
- 石川近代文学館
- 石川啄木記念館
- 石坂洋次郎文学記念館
- 泉鏡花記念館
- 一茶記念館
- 井上靖記念館
- 岩手県立埋蔵文化財センター
- 大島博光記念館
- 小川未明文学館
- かごしま近代文学館・メルヘン館
- 春日井市道風記念館
- 神奈川文学振興会
- 金沢文芸館
- 軽井沢高原文庫
- 北九州市立文学館
- 北九州市立松本清張記念館
- 虚子記念文学館
- くまもと文学・歴史館
- 高知県立文学館
- こおりやま文学の森資料館
- 高志の国文学館
- 斎藤茂吉記念館
- 坂の上の雲ミュージアム
- 佐藤春夫記念館
- 白鳥省吾研究会事務局
- 新宿区立漱石山房記念館
- 世田谷文学館
- せたがや文化財団
- 全国文学館協議会
- 仙台文学館
- 鷹山宇一記念美術館
- 高山市文化協会
- 遅筆堂文庫
- 東京都江戸東京博物館
- 藤村記念館
- 東北大学史料館
- 東北大学総合芸術博物館
- 徳島県立文学書道館
- 豊島区立郷土資料館
- 中原中也記念館
- 日本近代文学館
- 日本現代詩歌文学館
- 俳人協会
- 俳人協会青森県支部
- 八戸市新美術館建設推進室
- 八戸市博物館
- 姫路文学館
- 弘前市立郷土文学館
- 福井県ふるさと文学館
- 福岡市文学館
- 文京区立森鷗外記念館
- 文京ふるさと歴史館
- 北海道立文学館
- 前橋文学館
- 松山市立子規記念博物館
- 三浦綾子記念文学館
- 三鷹市山本有三記念館
- 南相馬市植谷・島尾記念文学資料館
- 宮校二記念館
- 武者小路実篤記念館
- 棟方志功記念館
- 室生犀星記念館
- 盛岡てがみ館
- 山梨県立文学館
- 吉村昭記念文学館

《館報》

新収蔵資料

新谷ひろし揮毫の色紙・短冊



館務日誌 令和2年

企画展「今日出海展―直木賞受賞から70年―」

令和元年10月26日～令和2年1月13日

エクステンション常設展示

「寺山修司 発想の源泉―旧蔵図書から」

令和元年12月6日～令和2年5月26日

1月9日 朝日新聞社取材

1月11日 出前講座(八戸ブックセンター・伊藤)14名

1月15日 青森放送、青森テレビ取材

2月14日 東奥日報社取材

2月18日 陸奥新報社取材

2月20日 東奥日報社、デリー―東北新聞社取材

2月22日 「作家×スポーツ展」開催(～5月17日※)

※新型コロナウイルスの感染症拡大防止のため、4月24日から展示最終日まで臨時休館

2月28日 全国文学館協議会共同展示「関東大震災と葛西善蔵」開催(～3月25日)

読売新聞社取材

3月 6月まで新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、イベント・見学・出前講座を中止

1日に予定していた第18回青森県近代文学館川柳大会は、新型コロナウィルス感染症拡大防止の観点から中止

3月7日 読売新聞社取材

3月8日 文学館フェイスブックにて「おうちで文学館」企画開始

3月13日 文学館ガイドコーナーリニューアル

3月18日 読売新聞社取材

3月21日 青森朝日放送、青森テレビ取材

3月28日 朝日新聞社取材

4月2日 東奥日報社取材

4月24日 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、5月20日まで臨時休館

電話・FAX・メール・手紙によるレファレンスサービス、ホームページ・フェイスブックによる情報発信、パネル貸出は通常通り実施

10日に予定していた「作家×スポーツ展」日曜講座は、新型コロナウィルス感染症拡大防止の観点から中止

5月29日 エクステンション常設展示「石坂洋次郎の名著」開催(～11月25日)

5月31日 青森朝日放送取材

6月 青森県近代文学館文学資料調査員会議を中止し、郵送・メールに代替

6月5日 陸奥新報社取材

7月 イベント・見学・出前講座を再開(参加人数制限、検温、連絡先の記入をお願いを実施)

11日から開催を予定していた特別展「中津軽文学散歩」は、新型コロナウィルス感染症拡大防止の観点から展示・関連イベントを中止

7月11日 図録「中津軽文学散歩」を刊行

7月17日 青森大学社会学部(13名)見学

7月19日 青森大学薬学部(3名)見学

7月29日 青森大学社会学部(12名・17名)見学

7月30日 小中学校初任者研修講座(48名・48名)・見学

9月1日 青森中央高校(4名)見学

9月2日 青森商業高校(4名)見学

9月3日 青森県近代文学館評議員会

9月6日 出前講座(弘前南高校・武永)37名

9月17日 読売新聞社取材

10月16日 青森南高校(4名)見学

10月23日 東奥日報社取材

10月24日 「ミステリーの魔術師 高木彬光 生涯100年展」開催(～11月11日)

(入館時の検温の実施、観覧順路を設定)

10月25日 村田アツミ氏(竹内俊吉三女)、村田泉氏(竹内俊吉孫)、柿崎淳氏(共同通信社青森支局長)来館

10月26日 青森朝日放送取材

10月29日 太宰治の文学の旅(19名)見学

11月3日 青森朝日放送取材

11月10日 県民カレッジ「てのひら」取材

11月15日 高木晶子氏(高木彬光長女)、山前謙氏来館

11月16日 朝日新聞社取材

11月17日 大湊高校川内校舎(16名)見学、高木保氏(高木彬光甥)、相馬信吉氏(妻海の念)来館

12月3日 東奥日報社取材

12月4日 エクステンション常設展示

「三浦哲郎 師・井伏鱒二の思い出」(～5月23日)

12月14日 読売新聞社取材

12月16日 エイティンブイ・ビジョン取材、青森第二養護学校(15名)見学

青森県近代文学館資料集第12輯刊行

青森県近代文学館では、本県近代文学への理解を深め研究に資するため、隔年で「資料集」を刊行しています。

資料集第12輯として『葛西善蔵・原稿「姉を訪ねて」(非売品)』を令和3年3月30日に刊行しました。葛西善蔵は現存している原稿の少ない作家であるという定評がありましたが、当館では平成30年に直筆の原稿「姉を訪ねて」を収蔵することができました。この原稿は、これまで古書店の目録等に一枚目の写真が掲載されたことはありましたが、その全貌は明らかになっていませんでした。

竹浪直人(当館文学専門主幹)による解説を含め、全ページをPDF化してホームページ上で公開しています。

多くの方にご覧いただけたらと思います。

<http://www.plib.pref.aomori.lg.jp/viewer/info.html?id=51>

青森県近代文学館報 第三十八号

発行日 令和三年三月三十一日

編集発行 青森県近代文学館【青森県立図書館内】

〒030-0184 青森市荒川字藤戸一八九七

電話 〇一七三九一五七五

<http://www.plib.pref.aomori.lg.jp/viewer/info.html?id=30>